

<エッセイ>

あらぬ方向：業績紹介に代えて¹

中川 理*

授業はのちに『太宰治を文化人類学者が読む』[春日 1998a]として出版される内容だったから、それに先立つどれかの年だっただろう。大阪大学吹田キャンパスの人間科学部一階にある縦長の教室で、春日先生（以下敬称略）が授業をしていた様子が、とても印象に残っている。春日は「決して」学生たちを正面から見ることなく、ずっと右上の窓の外を眺めながら、誰に対して語っているのか分からないような調子で話を進めていた。「あらぬ方向」を見る姿が目には焼き付いているのは、私だけではなかったようだ。当時を知る人と話すと、春日の印象としてまず出てくるのはこの姿だ。

この姿は、教師（そして研究者）としての春日のある一面を示していると思う。学生たちを正面から見すえて対峙するのでもなく、学生たちの先頭に立って一緒の方向を向いて進んでいくのでもなく。学生たちの前で、「あらぬ方向」を向いて考えている。学生たちは、その視線の先にあるものを簡単には理解できない。時には、いったい何を話しているのかと感ずることさえある。しかし、そうであるだけに、その位置に立ってその方向を見たとしたらそこにはどのような景色があるのか、想像力をかきたてられる。そして、その景色を、何とか自分の思考と接続しようと試みるよう導かれる。春日は、つねに「あらぬ方向」を見続けることで、そのような喚起力を発揮する教師／研究者であり続けてきた。

*

このように書いたからといって、春日の思考がいつも難解だったと言いたいわけではない。フィジーの歴史人類学に関する春日の記述は、読者を先へと読み進むよう駆り立てていく、生き生きとした力がある。主著『太平洋のラスプーチン』[春日 2001]でのヴィチ・カンバニ運動の主導者アポロシについての記述や、そのライバルで偉大な政治的指導者であったスクナについての記述 [春日 2002a] は、そのもっとも顕著な例だろう。そして、歴史を物語る時だけでなく、フィジー人にとっての主要な概念の歴史的変化について分析

¹ 今回、『くにたち人類学研究』編集部からは、業績紹介をということで依頼をいただいたが、準備不足を理由にエッセイとしてお引き受けした。春日の業績の全体像を描くためには、初期の経済人類学研究 [春日 1988]、ANT や存在論的転回といった新しい理論との関わり方 [春日 2011a]、そして何より、最終講義でも展開された、数学を組み込んだ最近の研究について、もっとしっかりと考える必要があるだろう。

* 立教大学異文化コミュニケーション学部准教授

する時もまた、春日の思考は極めて明晰だ。資本主義への包摂にともなう呪術観念の変化 [春日 1992]、「国」にあたるマタニトゥという概念の変容 [春日 1994]、土地に対する意識の持続と変化 [春日 1999] などについての研究は、錯綜した歴史資料を読み解いて、説得力のある解釈を見事に浮かび上がらせている。

しかし、その上で同時に、理解を目指すこのような最大限の努力にもかかわらず残る問いに、春日はつねにこだわり続けていた。その問いは、「本当の～は何なのか」というかたちで示される。この問いは、フィジー人を理解しようとした宣教師たちや人類学者としての春日自身が問うてきたと同時に、フィジー人たちが問うてきたという意味で、再帰的な問いである。

例えば春日は、フィジー首長の力を恵みか暴力性のどちらかに回収してしまう（前者はホカート、後者はニコラス・トーマスに代表される）解釈を批判している [春日 1995; 2002b]。そして、これら二つの解釈の和解は、「フィジーの人々は矛盾をはらんだ価値の中で生きていたのだ」 [春日 1995: 129] ということを受容することによって可能になると述べている。しかし、それでは矛盾をはらんだ存在としてのフィジー人を、どのように理解すればよいのだろうか？改宗前に食人を行っていたフィジー人の、残虐さと優しさという矛盾に直面した宣教師が問うたのは、まさにこのような「本当の彼らは何なのか」という問いだった [春日 1998b]。春日は、食人を一面的な解釈によって「毒抜き」しようとする学問的研究を批判し、「本当の彼ら」へと何とか接近しようとする宣教師に共感を寄せている。そして、春日自身、一面的な解釈への回収をとがめられたフィジーでの経験から、その問いへと導かれている。「私は人類学者としての自己満足的な解釈をオセアの言葉としぐさによって打ち砕かれて、学問共同体の外へとさまよい出た。サーリンズに代表される人類学者の側から宣教師のほうへと近づき、『本当の彼らとは何なのか』を問題化する地平へと入り込んだ」 [春日 2008: 39] …。

同じように、白人に支配される過去と現在の苦難が乗り越えられ、フィジー人に至福の時が到来すると予言するアポロシのヴィチ・カンバニ運動もまた、「本当の私たちは何なのか」という問いに関わっていた。春日は次のように書いている。

本当のフィジーとフィジー人がどうあるべきか。アポロシの運動はほとんど、この問題によって人々を鼓舞したとあってよい。ヴィチ・カンバニという会社を創設し、双子の神をキリスト教の神として認め、「新時代」の到来のために奮励努力することは、すべて世界の、フィジーのあるべき姿を顕現させるために他ならない。 [春日 2007: 199]

こうして、ヴィチ・カンバニ運動のフィジー人と人類学者である春日の「本当の～は何なのか」という問いは重なり合う。この「本当」は、なかなか現実のものにはならない。

訪れるはずの至福の時は、何かの問題（偽りや罪）のせいで訪れない。しかし、それによって希望は捨て去られるわけではない。ありえたはずのことを次こそは現実化しようとする新たな希望を、失敗は生み出していく。おそらく、人類学にとっての「本当」も同じだ。ここに、いわば春日が「できてしまう」、「やってしまう」明晰な学問的解釈を乗り越えて、容易に顕現しない「本当」へと向かう、「あらぬ方向」への欲求が見えてくる。この欲求は過剰で、できれば見ないことにしておきたい性質のものだ。そうやって「毒抜き」できれば、優れたオセアニア研究者という枠に収めることができるのに。しかし、そうすると、春日の研究の肝心な部分を削り取ることになってしまうだろう。

*

ここから先は、全くの推測でしかない。本当であれば、どうしてそう言えるのかを示さなくてはいけないのだろうが、(きちんと理解できていないから) それもできない。だからとても印象論的な言い方になってしまうのだが、春日のより最近の研究もまた、「本当」へと向かおうとする力と関係しているように見える。実験用ミニブタと老人ホームのフィジー人を [春日 2011b]、数学の証明と制度を [春日 2013]、物理的時間とフィジー人の時間を [Kasuga 2017]、より一般的に言えば科学と文化を [春日 (編) 2016]、アナロジーによって結びつけることを通して、バラバラにそれぞれを検討していたのでは見えない「本当」を、春日は出現させようとしているのではないか。

「あらぬ方向」へと向かう力は場違いな感じがして、おとなしく学問的枠組みの中に収まっておきたい気持ちを不安にさせるかもしれない。「何を言っているか分からない」と言っていて、ないものとしておきたいかもしれない。しかし、そこから何が見えるのか、考えたくなくなることも確かだ。春日の仕事の欠かせない一部としての「収まりの悪さ」は、それぞれの研究者がより自由に考え始めるためのきっかけなのである²。

参考文献

春日 直樹

1988 『経済人類学の危機：現代社会の「生存」をふりかえって』世界書院。

1992 「キリスト、悪魔、貨幣：フィジーの呪術と資本主義」、『社会人類学年報』18: 33-

² 例えば、私自身の研究に関して言えば、今回このエッセイを書くなかで、モンについての自分の近年の研究が、春日のヴィチ・カンバニ運動の研究と関連付けられることを再認識させられた。分断状況を一気に乗り越える「王」や「国」を求めるモンは、アポロシに祝福をもたらす王を見たフィジー人と似ている。それでは、対象と方法の両方のレベルで「本当」について考えるならば、私の分析はどうなるのだろうか？先達としての春日は、収まりのいい分析を超えて進むように迫ってくる。それは、彼のやった通りやるべきということではなく、その過剰さに自分なりに応じなければと感じるということだ。

55。

- 1994 『土地の民』からみた国家の形成と変容、『マタンギ・パシフィカ』熊谷圭知・塩田光喜（編）、pp.209–226、アジア経済研究所。
- 1995 「恵みと暴力：フィジー首長の<力>」、『洗練と粗野：社会を律する価値』清水昭俊（編）、pp.116–131、東京大学出版会。
- 1998a 『太宰治を文化人類学者が読む：アレゴリーとしての文化』新曜社。
- 1998b 「食人と他者理解：宣教師のみたフィジー人」、『暴力の人類学』田中雅一（編）、pp.381–408、京都大学学術出版会。
- 1999 「土地はなぜ執着を生むか」、『土地所有の政治史：人類学視点』杉島敬志（編）、pp.371–389、風響社。
- 2001 『太平洋のラスプーチン：ヴィチ・カンバニ運動の歴史人類学』世界思想社。
- 2002a 「大首長の光と影：フィジーのスクナ」、『民族の運動と指導者たち』黒田悦子（編）、pp.32–50、山川出版社。
- 2002b 「首長制の深淵」、『オセアニア・ポストコロニアル』春日直樹（編）、pp.109–142、国際書院。
- 2007 『〈遅れ〉の思考：ポスト近代を生きる』東京大学出版会。
- 2008 「ユートピアの重さ、ポストユートピアの心地よさ」、『ポスト・ユートピアの人類学』石塚道子・田沼幸子・富山一郎（編）、pp.29–44、人文書院。
- 2011a 『現実批判の人類学：新世代のエスノグラフィ』世界思想社。
- 2011b 「生のケアと時間：実験用ミニブタと公立老人ホームのフィジー人を接続する」、『時間の人類学』西井凉子（編）、pp.204–225、世界思想社。
- 2013 「数学の証明と制度の遂行：ケプラー方程式から出発する進化の考察」、『制度：人類社会の制度』河合香吏（編）、pp.287–308、京都大学出版会。

春日 直樹（編）

- 2016 『科学と文化をつなぐ：アナロジーという思考様式』東京大学出版会。

Kasuga, Naoki

- 2017 Between Two Truth: Time in Physics and Fiji. *Social Analysis*. 61(2): 33–46.